

令和 5 年 7 月 3 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02003

研究課題名(和文) 二十世紀初頭の北米大陸におけるワーグナーの舞台神聖祝祭劇《パルジファル》受容

研究課題名(英文) Reception of Wagner's sacred stage festival music drama>"Parsifal"< in the North American Continent of the early 20th century

研究代表者

山崎 太郎 (Yamazaki, Taro)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授

研究者番号：40239942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：メトロポリタン歌劇場による《パルジファル》北米初演およびそれに続く同歌劇場の計130回にわたる巡業公演、さらにはEnglish Grand Opera Companyの北米46都市をまわり計224回に及ぶ英語歌詞による巡業公演について、webサイトHistorical News Paperに網羅された当時の新聞記事を精査、作曲者の意志に反してパイロイト以外の地で作品を上演することの是非、同作品の宗教的性格をめぐる論争、両歌劇団による上演そのもの比較、値段設定や観客層を比較・検証することで、20世紀初頭に多くのアメリカ人を巻き込んだ「パルジファル・フィーバー」の実態について解き明かそうとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は ドイツの歴史との絡みで、反ユダヤ主義やナチスの問題に議論が集中してきた《パルジファル》受容史にあって 先行研究が詳しく踏み込むことのなかった、ヨーロッパ外の地域における、きわめて限定された期間(1903～05年)の作品受容に焦点を当てたものであり、古新聞等の一次資料収集を中心とする実証的手法をとる点でも、ワーグナーの作品研究史上ユニークな位置を占める。さらに社会学的な視点を盛り込むことで、一オペラの作品受容が単なる音楽界の出来事にとどまらず、アメリカ社会の文化・生活・宗教の多様性をも映し出す一大文化現象にほかならなかつたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to reconstruct precisely and concretely the whole contents of The Metropolitan Opera's 1903 North American premiere of "Parsifal" and its subsequent tour up to 1905, as well as the English Grand Opera Company's attempt to perform the same piece in English 224 times in 46 North American cities in 1904 and the following year, by the investigations the extensive news paper articles archived in the website "The Historical Newspapers". The articles cover the pros and cons of performing the work outside of Bayreuth against the composer's will, the controversy over the religious nature of the work, a comparison of the two opera companies' performances themselves, and a comparison and verification of the pricing and audience demographics. The study attempted to shed light on the reality of the "Parsifal Fever" that engulfed many Americans at the beginning of the 20th century.

研究分野：ドイツ・オペラ研究

キーワード：芸術諸学 独文学 社会学 西洋史

1. 研究開始当初の背景

舞台神聖祝祭劇と名付けられたワーグナー最後の楽劇《パルジファル》(1882年初演)はその宗教的な内容に加え、「門外不出」という作曲者自らの遺言によって、秘教的作品というイメージがまとわりつくこととなった。著作権の切れる1913年まで、ヨーロッパでこの作品に接するためには、パイロイトを訪れる以外に方途はなかったのである。ところがアメリカ大陸では事情が違い、1903年にはメトロポリタン歌劇場(以下MET)がパイロイト以外で初めての舞台上演に踏み切っている。本家パイロイトの意向に背くこの決定は多くの議論を呼び、人々のあいだに未知の作品への興味と期待をかきたてた。《パルジファル》への関心が一部の愛好家に限られたものでなく、広く社会現象と呼べるほどの規模であった事実は、同歌劇場が合計12回の上演をすべて満席にしたあと、同プロダクションとともにアメリカ各地に一年間で計130回の巡業公演を行なったこと、さらには興行師ヘンリー・サヴェージ率いる巡業歌劇団 English Grand Opera Company (以下EGOC) が1904年10月から《パルジファル》の英語ヴァージョンをもってカナダを含む46の都市をまわり、1年間で計224回の公演を打ったことから裏付けられる。レコードでの予習も不可能な時代、わずか一年のあいだに、ワーグナーの楽劇のなかでもひとときわ深遠にして難解とされるこの作品の上演に、実に延べ数十万人のアメリカ人が押し寄せたというわけで、1903~05年にかけて《パルジファル》に接したアメリカ人の総数は、初演以来のヨーロッパ人受容者総数を上回っていたことになる。作品そのものの魅力を超えて、社会と人間心理の複雑な要因がそこに働いていたと考えるべきだろう。

本研究はドイツの歴史との絡みで、反ユダヤ主義やナチスの問題に議論が集中してきた《パルジファル》受容史にあって先行研究が詳しく踏み込むことのなかった、ヨーロッパ外の地域における、きわめて限定された期間(1903~05年)の作品受容に焦点を当てたものであり、古新聞等の一次資料収集を中心とする実証的手法をとる点でも、ワーグナーの作品研究史上ユニークな位置を占める。

2. 研究の目的

ワーグナー最後の楽劇《パルジファル》(1882年初演)は作曲者の遺言により1913年までパイロイト音楽祭以外で舞台上演されることはなかったが、ヨーロッパの著作権協定が効力を持たないアメリカ大陸ではニューヨークのMET本拠地における北米大陸初演(1903年)を皮切りに、翌々年にかけて各地で数多くの巡業公演が行われた。本研究は《パルジファル》受容史のなかでもとりわけ注目すべきものでありながら、その実態が未だ解明されているとは言い難いこの現象に着目し、フィールドワークと新聞等の記録資料収集ほかの実証主義的手法に基本をおきながら、オペラ受容に表れた当時のアメリカ社会の精神風土を明らかにしつつ、《パルジファル》という作品の特殊性に新たな方向から光を当てようと試みるものである。

3. 研究の方法

以上を踏まえ、山崎は以下に挙げる問題への着眼点と方法から、特にニューヨーク初演後の二つの歌劇団によるアメリカ大陸巡業について重点的に調査を行ない、二十世紀初頭の新大陸におけるオペラ上演の実情を明らかにし、さらにはその時代のアメリカ社会の様相

を炙り出すことで、《パルジファル》という作品の宗教的かつ秘境的性格について改めて考察を行なう。具体的には以下の3つの問いを立てながら、それぞれ調査と分析を進めた。

A. メトロポリタン歌劇場における《パルジファル》初演の詳細

初演に至るまでに、どのような議論や準備があったのか。ドイツの本家バイロイト側の反応と決裂に至るまでの交渉、欧米両者のジャーナリズムの反応、劇場の広報宣伝活動、配役・舞台装置・衣装等の決定とリハーサル、聴衆の反応と批評。全体の出発点となる以上の事柄については、上に挙げた先行諸研究でもある程度詳しく触れられている。本研究ではメトロポリタン歌劇場資料部や各図書館の協力を得て、当時の新聞や手紙等の一次資料に直接あたることで、先行研究の成果をさらに大きく補うことを目指す。

B. メトロポリタン歌劇場および巡業歌劇団 EGOC による《パルジファル》北米大陸巡業公演の比較調査

上演された都市（劇場）と日付、配役等々、事前の宣伝、切符の売れ行き、各地での批評。そして何よりも、人々がこの長大で難解な未知の作品にどのように反応したのか、それはまた聴衆の階層、文化・音楽の素養（それぞれの都市におけるワーグナー、オペラ上演の歴史）、信仰（カトリック、プロテスタント、ユダヤ教その他）とどのような相関関係があるのか。人種、宗教、階層によって生活圏が分かれるアメリカ社会においては、それぞれの都市・地方の特色が《パルジファル》受容にも反映するのではないか。

C. 巡業歌劇団 EGOC による《パルジファル》英語上演の詳細

本家バイロイトに倣い、作者の意思を忠実に再現しようとした MET の原語上演と、親しみやすい英語上演で作品をアメリカの大衆に届けることを目的にした巡業劇団のプロダクションは当然、性質が違う。演出、演奏、配役および巡業先（聴衆）の選定において、両者の上演にどのようなレベルの違いがあったのか。とりわけ EGOC が使用した楽譜（英訳の内容、場面のカット・短縮等の有無）に関しては先行研究で全く言及されておらず、一次資料にあたっての調査が必要になる。

4. 研究成果

メトロポリタン歌劇場における《パルジファル》初演の詳細

MET 資料室で記録資料を収集、加えて web-site > Historical Newspapers < にアーカイブされた関連記事を検索・調査することで、舞台・衣装の写真や上演批評を通し、《パルジファル》アメリカ初演に関する公演の様相を把握するとともに、《パルジファル》上演の決定・発表から初演に至るアメリカのジャーナリズムおよび世論の推移、さらにはチケット入手をめぐる争い、観客の服装や幕間の食事等に関する具体的な描写をも解読・整理し、《パルジファル》北米初演が単なる音楽界にとどまらないアメリカ社会全般を巻き込んだ風俗的イベントでもあった事実を確認した。

メトロポリタン歌劇場および EGOC のアメリカ巡業公演に関する調査

web-site > Historical Newspapers < に網羅された 1903 年～1905 年の《パルジファル》関連記事（合計 2 万 5 千件以上）を検索調査、Daniela Smolov Levy の博士論文 DEMOCRATIZING OPERA IN AMERICA, 1895 TO THE PRESENT（2014 年）に掲載された EGOC の《パルジファル》公演の巡業地および日程に関するデータと突き合わせながら、公演日と公演地、チケットの値段、公演が行われた劇場・団体のレポーター、事前の広報宣伝や聴衆への啓蒙活動、上演批評などの具体的情報を収集さらにはメトロポリタン歌劇場のニューヨーク初演とそれに続く巡業公演の記事についても同じ項目を収集す

ることで両者を比較。その結果、例えばアメリカ東部とシカゴ、サンフランシスコなどの大都市を中心にしたメトロポリタン歌劇場の巡業公演と、カナダを含む北米の広範な地方都市をまわった EGO 巡業は値段設定も大きく違い(メトロポリタン歌劇場は本拠地で\$10, \$5, \$3, \$2, \$1、巡業公演では\$7~\$1.5 に対して EGO は\$3~\$1)、観客もエリート層を前提にした MET に対し、一般市民層をターゲットにしつつ、芸術・教養の普及・大衆化を目指した EGO の方針がアメリカ民主主義の理念とも結びついていたことを確認。パイロイトのスター歌手を起用した MET に対して、EGO はドイツおよびアメリカの若手歌手を主に起用しながらも、演出・指揮に練達のスタッフを集め、英語上演に向けた周到な稽古と準備を行い、上演そのものも押しなべて高評価を得ている。こうした上演形態や公演の質に関する比較と並んで、本研究で重要な対象となったのは公演のあった地域ごとの広報宣伝や啓蒙活動、観客層やそのドレスコード(例えば上演を訪れた地方名士の名前と服装を列挙した記事)幕間の食事(いくつかの都市では1幕と2幕のあいだの長い幕間に観客が食事のため一時帰宅し、服も着替えた事実を伝える記事)等々の周縁的な風俗現象に関する記述の網羅と比較であり、こうした新聞記事を丹念に収集・解読することで、大手全国紙よりも群雄割拠の観を呈する地方紙が当時のアメリカのメディアにおいて大きな役割を担っていた事実を再認識するとともに、1903~5年の《パルジファル》公演が文化・宗教・社会生活などが地域やコミュニティーごとに大きく異なるアメリカという国家の多様性をも映し出す一大文化現象にほかならないことを具体的な事例とともに裏付け、一作品の上演史を社会・文化史研究のうちに位置付けた。

《パルジファル》の宗教的性格に関する19世紀末~20世紀初頭のアメリカ社会の論争と現代の作品観の比較

1900年前後に出版された英語による文献の復刻版を購入・解読、《パルジファル》という作品とワーグナーの思想(再生論、動物愛護と文明批判)の関連性がどの程度理解され、どのように語られていたかを確認するとともに、アメリカ初演(1903年)に向けて、当作品の内容がアメリカの聴衆にどのように啓蒙・紹介されたのか、とりわけプロテスタント・カトリック両陣営の宗教関係者の中で当作品の宗教性がどのように受けとめられたか、会衆に善き感化を及ぼす作品か、それとも、(例えばマグダラのマリアとイエス・キリストの関係が外題役と女主人公クンドリーの場面に重ねられること、長い接吻のシーンが舞台に現れることをはじめ)宗教的内容を舞台化によって冒瀆しているのか等々をめぐる賛否の論争などを具体的に知ること、通常のおペラとは違うこの作品の特殊性と、アメリカならではの受容について、新たな視点を得ることができた。(例えば、本科研中に発表された論文 A Wagnerian Battle for Souls (Richard Strauch, Nineteenth Century Music Review, Vol.20, 2020)で、Strauchはこの作品の宗教性に対する評価の違いがカトリックとプロテスタントの対立ではなく、むしろプロテスタント内部の[科学文明と資本主義が浸透する社会全体で信仰心そのものが失われつつあることを危惧する]保守派とリベラル派の見解の違いに起因するものであることを立証している。)なお、本研究を進める過程で、当時《パルジファル》をもとにした(パロディーも含めた)芝居や小説が書かれ、上演もされてきた事実を突きとめ、テキストを収集することができたが、これらの作品は大まじめな宗教論争とはまた別の側面から、《パルジファル》がアメリカ社会一般でどう受け止められてきたかを照らし出す新たな材料となるだろう。

一方、2019年3月にドイツ・ミュンヘンで行なわれたシンポジウム『リヒャルト・ワーグナーと神学』に参加、ワーグナー研究を牽引する国際学術誌 Wagner Spectrum におけ

る特集『ワーグナーと宗教』『パルジファル』にそれぞれ掲載された諸論文や現代イギリスの哲学者 Scruton の著作をはじめとする英米圏での《パルジファル》作品論を読み込むことで、地誌学的性格の強い上演史研究という性格を持つ本科研での研究を作品そのものの解釈と接続する手がかりを得た。山崎が以前から取り組んできた演出史および演出分析研究の成果とも併せ、見えてきたのは、《パルジファル》の宗教性を論じるうえでの過去100年における視点の広がりや深化である。すなわち当時のアメリカ社会においては 当時のヨーロッパ同様 聖杯や聖槍といった聖遺物の存在、礼拝の儀式性、聖書の場面と作品の結びつき、イエス・キリストとパルジファルの比較、音楽そのものの宗教性の度合いといったことが議論の中心となっており、登場人物やあらすじの展開については図式的な勤善懲悪的な視点で片付けられてきたのに対し、演出による問題提起とも連動しながら今日にいたった近年の研究史においては、外題役の精神分析学の知見をも汲んだ事物やプロットの象徴性が浮き彫りにされるとともに、クンドリーをはじめとする登場人物の性格や関係性にも新たな光が当てられ、もっぱら正義の側を代表すると見られてきた聖杯騎士団の独善性が指摘されるなど、作品が孕み持つ多義性がますます明らかにされつつある。

研究成果の執筆と発表に向けて

EGOC が使用した新英訳上演の総譜とテキストが入手できていないことをはじめ、本科研当初の目的・計画進行のうち、いまだ取り残している部分とともに、本科研進行の途上で視野に入った問題で、さらなる調査への関心を掻き立てたものもある。

例えば、本研究が対象としたのは北米大陸における1903～1905年の《パルジファル》公演であるが、このときアメリカ社会全体に広がった「パルジファル熱」はけっして突発的なものではなく、1882年の《パルジファル》パイロイト初演直後からアメリカにおいて前奏曲をはじめとする作品の抜粋上演が行われ、さらには1886年以降、ニューヨークやボストンなどアメリカ東部の大都市を中心に複数回、コンサート形式による上演が行われてきた事実も本研究の途中で明らかになった。それらの試みを上演批評とともに伝える当時の新聞記事に並び、パイロイト音楽祭における初演以来の本作品の上演を英語圏の人々が実地で観劇し、その感想や批評がアメリカの新聞でどう伝えられたかも、この作品に関する理解と関心をアメリカ大陸全体に広げるのに一役買ったことであろう。本科研の最終段階において山崎は以上のような作品理解の醸成経過を1903年以前に遡って調査することも益であると考えに至り、当時の新聞報道記事の収集・解読を開始している。

また(上記 Levy 博士論文の註に小さく記されているように)カンザスシティの黒人向け専門紙 The Rising Son 1905.3.17 は月末に同市で行なわれる MET の《パルジファル》巡業公演を第一面で伝え、しかもそこに有色人種のための特別枠(\$1)が設定されていると告知しているが、当然関心は「MET はほかの都市についても、このような特別枠を設けていたのか?」一方で EGOC は有色人種のオペラ鑑賞をどう考えていたのか? という問いにもつながってゆく。これについて詳しい事情を知るためには、各地方で発行された当時の黒人向け新聞を改めて精査しなければならないが、 奴隷解放後とはいえ、第二次世界大戦後の公民運動のはるか以前 被差別人種の教養文化の普及と受容の度合いがどのようなものであったかを考察することは、アメリカ史についての大きな理解にも利するのではないか。

山崎は科研期間後に行なわれるこれらの研究調査をも加えたうえで、その成果を(新聞記事をはじめとする一次文献の翻訳が大きな部分をなすと思われる) 学術書ないしは一般書としてまとめあげるべく鋭意準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 《ニュルンベルクのマイスタージンガー》における祝祭の諸相	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新国立劇場《ニュルンベルクのマイスタージンガー》公演プログラム	6. 最初と最後の頁 26-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 牧歌の終焉 ニーチェとワーグナーの蜜月時代をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新国立劇場《ヴァルキューレ》公演プログラム	6. 最初と最後の頁 21-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 癒しへの道のり	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京・春・音楽祭2021公式プログラム	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 歌劇化されたゲーテの小説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 マスネ《ウェルテル》（新国立劇場公演プログラム）	6. 最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 ラン・ジークリンデ・ラン ある女性の遁走を読み解く三つの試論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ワーグナー・シュンポシオン 2017	6. 最初と最後の頁 92~118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 《ジークフリート》と豊饒の森 ワーグナーにとってのスイス	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 新国立劇場《ジークフリート》公演プログラム	6. 最初と最後の頁 23~26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 ワーグナー豊饒の年を振り返って (国内ワーグナー上演 2016)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ワーグナー・シュンポシオン 2017	6. 最初と最後の頁 140~152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 この3冊・ワーグナー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 響きと追憶 びわ湖ホルの《ヴァルキューレ》に寄せて(リレーエッセイ Road to the Ring)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 舞台芸術情報誌「湖響」No.73	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山崎太郎
2. 発表標題 あらがいがたい恋の力よ! この世の最も甘美な迷妄よ! ワグナーのショーペンハウアー受容を中心に
3. 学会等名 未来の人類研究センター(東京工業大学・科学技術創成研究院)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 アルンフリート・エードラー	4. 発行年 2020年
2. 出版社 西村書店	5. 総ページ数 592
3. 書名 シューマンとその時代	

1. 著者名 リヒャルト・ワーグナー、三光 長治、池上 純一、松原 良輔、山崎 太郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 556
3. 書名 ベートーヴェン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------